出題のねらい

一は、恩田陸『蜜蜂と遠雷』からの出題です。恩田陸は、『夜のピクニック』『ユージニア』などの作品で知られる作家で、出題した『蜜蜂と遠雷』で第156回直木三十五賞と第14回本屋大賞を受賞しています。平易な文体でありながら、登場人物の立場や心情が非常に的確かつ丁寧に描き出されますので、読解にあたっては一つ一つの表現の意味するところを丹念に読み解く必要があります。

二は、松田美佐『うわさとは何か　ネットで変容する「最も古いメディア」』からの出題です。その中から、題にある通り、うわさとはどのようなものであるかを人との関係性から説明した論説的文章であり、丁寧に読み解くことがポイントとなります。

一

【解　答】（50点）

問一	a 務	b 薄化粧	c 魔法瓶	d 動揺	
	e 塊				(2点×5)
問二	Ⅰ エ	Ⅱ ウ	Ⅲ イ	Ⅳ ウ	(2点×4)
問三	A イ	B オ	C エ	D ア	E ウ
					(2点×5)
問四	紅茶				(2点)
問五	グランドピアノはまるで墓標のように見えた				(3点)
問六	足元が～喪失感				(4点)
問七	亜夜は母の死を理解できていなかったが、周囲の人々は亜夜が母の死を乗り越えたと認識していた。(45字)				(6点)
問八	ウ				(3点)
問九	あたしにとっての音楽は消えた				(4点)

【解　説】

問一　b・c・eでそれぞれ誤答が目立ちました。具体的には、bは「薄」の点、cは「魔法瓶」の「瓶」をそれぞれ書いていない答案がありました。またeの「塊」が「魂」になっているものが見受けられました。

問二　慣用表現を問う問題です。空欄Ⅰの「泰然自若」は落ち着いて物事に動じないさま、空欄Ⅱの「我に返る」ははっと気がつく、他のことに気を取られていたのが本心にかえる、空欄Ⅲの「踵を返す」はあともどりをする、ひき返す、空欄Ⅳの「一目散に」はわき目もふらずに駆けるさまをそれぞれ意味します。文脈に適合する選択肢はそれぞれ一つしかありません。難解な問題は出題していませんので、普段から慣用表現を意識するようにしてください。

問三　Aは直前に「もう少し彼女の年齢が上であれば」とあるのがヒント。そして「十四、五歳になっていれば」話は違っていたと述べているのですから、正解は「せめて」です。Bは「家事は同居している祖母がほとんどをカバーしてくれていた」、だから「生活に不自由することはなかった」という文脈ですから、正解は「とりあえず」。Cは、亜夜が母の死について「理解していなかった」とありますので、「なかった」という否定表現との呼応関係に着目すれば、正解は「まだ」だとわかります。Dは、「何事もなかったかのように、自然に」リハーサルができたことに対し「あんなことができた」理由を自問していますので、正解は「なぜ」。Eは、「たいしたもんだ」という気持ちと、「ショック受けてるかと思ったけど、落ち着いてた。」という気持ちが対比的に述べられていますので、正解は「もっと」です。全体的によくできていました。

問四　本文の文脈をたどると、まず「ねえお母さん、紅茶は?」と言いかけて「自分が楽屋に一人きりであることに」気づき、「巨大な喪失感」に襲われ、お母さんが「あたしに紅茶を渡してくれることも二度とない」と初めて認識する、そして母の死を理解するという流れになっています。したがって正解は「紅茶」です。「楽屋」という解答も少しありましたが、本文では、「楽屋」そのものが亜夜の認識を改めるきっかけになったとは書いていませんので、正解としてより適切なのは「紅茶」です。

問五　設問の文章では「母の死」を「象徴的に示す」箇所を答えるよう指示していますので、本文中から「死」を連想させる言葉を探します。ここで「墓標」という言葉を見つけられるかどうかがポイント。この言葉は本文中に二回出てきますので、このうち指定の字数に合う箇所が正解となります。「自分が楽屋に一人きりであることに気付いた」「天井がうす暗く遠ざかっていくのを感じた」という解答がありましたが、これらの表現だけでは誰かが死んでいることまではわかりません。また「お母さんは、もうこの世界のどこにもいない」という解答もありましたが、これは「象徴」的表現というよりは「母の死」を直接述べた一文ですので、正解としては不適切です。

問六　亜夜はお母さんがいつも準備してくれた紅茶が楽屋にないことをきっかけに「あたしは一人。一人きり」だと気づきます。つまりここで初めて母の死を実感したのです。この文脈をふまえると、この時の亜夜の心情として最も適当な箇所となるのは、母の死に対する気持ちが実感として表現されている部分とい

うことになります。「喪失感」はまさにその気持ちを表現していますので、ここを含む箇所が正解となります。「生温かいような、くすぐったいような、奇妙な感じ」という解答がありましたが、この表現だけでは亜夜が母の死にどんな心情をいだいたかは不明瞭ですので、正解とは言えません。

問七　母の死について亜夜と周囲の人々はそれぞれどのように認識していたか、両者の認識の違いがわかるように答える問題ですので、本文の中から根拠となる箇所を探します。すると亜夜については、「母がいなくなったということがどういうことなのか理解していなかったのかもしれない。亜夜が初めて母の不在を意識したのは、地方のコンサートホールの楽屋でだった。」、周囲の人々については「心配してたけど、一人でもしっかりしてるね。」、「ショック受けてるかと思ったけど、落ち着いてた。」、「やっぱり、演奏することで乗り越えるしかないんだね。」とあることがまずヒントになります。つまり亜夜自身は母の死をまだ理解していなかったのに対し、周囲の人々は、亜夜が母の死を理解し乗り越えていた、だからリハーサルでしっかりした演奏ができたと思っていたのです。この点で両者の認識は対照的だったわけですから、この内容を指定の字数内で文章にまとめます。

問八　本文には、まず「思春期の反発や母親の庇護下にいる鬱陶しさとぶつかる機会があったならば。」とあり、その後で「本来、亜夜はのんびりしていて何事にも全く欲がない。」とあります。つまりこの二つの表現は原因と結果の関係にはなっていません。したがって正解はウ。この問題はよくできていました。

問九　傍線部に「彼女は一度も振り返らず、スタスタと、やがて小走りになって」とありますから、こうした行動をとった時の亜夜に迷いはありません。このことをふまえると、傍線部の前に「冷たい確信が重い塊となって、彼女の中にすとんと落ち」とあることがヒントになります。では亜夜は何を「確信」したのか。このように丁寧に本文をたどると、その直前にある「あたしにとっての音楽は消えた」という箇所が「確信」の内実であることがわかります。すでに自分にとっての「音楽」は消えているから、亜夜は「一度も振り返らず」ステージから去ったのです。この問題もよくできていました。

二

【解　答】（50点）

問一	a 発露　b 顕著　c 鍵　d 呈 e 配慮	（2点×5）
問二	i イ　ii ウ　iii エ　iv ア	（2点×4）
問三	事実かどうか疑わしい話	（3点）
問四	イ	（3点）
問五	A エ　C イ	（2点×2）
問六	既存の人間関係	（3点）
問七	人との関係性を強化する	（3点）
問八	気持ちを共有すること	（3点）
問九	都市伝説はネタとして楽しむためのものなのに、それを指摘することはネタバレになって興ざめだから。（47字）	（5点）
問十	ア ×　イ ○　ウ ×　エ ×	（2点×4）

【解　説】

問一　本学の漢字問題に難問は出ません。よく使う漢字ばかりです。漢字を出題することは、オープンキャンパスでたびたびアナウンスしています。読める、わかるにとどまらず、書けるようにしておきましょう。毎年、漢字が必ず問われるのですから、問題集での書き取りの練習は、必須です。a「発露」 b「顕著」 c「鍵」 d「呈」に誤答が大きく目立ちました。

問二　論説的文章では定番とも言える、文や段落の展開を示す語句を補う空欄補充の問題です。①前後の文脈がどのような関係にあるか、②その関係を繋ぐ場合にどの語句が相応しいか、これらをきちんと理解しておいて下さい。そのためにも、それぞれの語句の役割を理解した上で、繰り返し練習して下さい。ii「ウ」、iii「エ」を逆にした誤答が目立ちました。「しかし」は逆接の接続詞（前の事がらから、当然、類推される結果とは逆の結果があとに続く）、「まず」は話題の始めであることを示す副詞、「一方」は対比の接続詞（前の事がらと、後の事がらを比較・対比する）、「さらに」は添加・累加の接続詞（前の事がらに、後の事がらを付け加える）です。

問三　基本的な語彙を問う問題です。「眉唾もの」とはどのような意味かを踏まえた上で、本文中から類義的な箇所を探す問題です。「眉唾もの」とは、「真偽の疑わしいこと」を意味する言葉です。

問四　問三と同じく、基本的な語句を問う問題です。ア「お約束の言葉」という誤答が目立ちましたが、これは「決まり切った言葉」という意味であり、文脈としてはすんなり通りそうでも、「枕詞」そのものの意味としては適切でありません。

問五　空欄補充から本文内容を正確に読み取れているかを問う問題です。Aについては、「他人は知らないことを知っている」ということから「優越（感）」が導き出されます。Cについては、「相手のことを聞く」ことに対して「〇〇好き」となっていることから、「細かい所までさぐり求めること」という「詮索（好き」）が導き出されます。

問六　空欄補充から本文内容を正確に読み取れているかを問う問題です。うわさが何を基盤にしているかを問うています。そこから、本文中に繰り返し現れている「人間関係」という言葉が基本になることはすぐに分かると思います。ただし、字数は八字以内です。こういった字数を制限した問題は、それに近い字数で答える必要があります。ここから「人間関係」をより詳しく（または限定）した答えが必要となります。空欄Bの後は「ところで」という接続詞があるように大きく話が変わり、それ以前については、「ここだけの話」を中心とした話題と、「「ここだけの話」ではない場合」を中心とした話題に分かれています。そして、空欄Bは後者の部分に位置しています。この部分における「うわさ」と「人間関係」との関係については、8頁9行目に「うわさは既存の人間関係を通じて広まる」とあり、ここから解答が導き出せます。

問七　本文内容を正確に読み取れているかを問う問題です。ただし、論説文では同じような内容を別の表現で繰り返すことがあり、それらの中から問題に沿って適切に解答することが求められます。「ここだけの話」を中心とした話題の冒頭にこの「つながりたい」が使われており、秘密の話の共有が「人との〝つながり〟＝関係性を強めてくれる」ものであることは理解できます。この部分に注目して、字数に沿った箇所を本文から探せば、「人との関係性を強化する」が導き出せます。

問八　本文の内容を理解できているかを問う問題です。「うわさが生まれる理由」を問うており、次の段落「これがうわさのきっかけになる」とあることから解答が導き出せます。但し、「これ」とは前の一文「それだけで少し気持ちが楽になるのだ。」だけを指すのではありません。この段落の「「大きな余震がきたらどうしよう」と……それだけで少し気持ちが楽になるのだ。」という全体を指しています。ですので、それらを纏めて述べた「気持ちを共有すること」が解答となります。

問九　本文内容を正確に読み取れているかを問い、それを正確に表現できるかを問う問題です。「都市伝説はネタとして楽しむために語られる」ことを前提として、それを指摘することがなぜ「野暮」・「空気が読めない」と言われるのか、その理由を説明する必要があります。

問十　本文内容を正確に読み取れているかを問う問題です。このような出題の場合に注意すべきことは、①選択肢内の文の前半部と後半部のどちらかが違っている（または、各部は本文で述べていても組み合わせが正しくない）、②一般的には正しい（正しそうに思える）が本文中で筆者は書いていない、③本文内容を拡大的（限定的）解釈しているという三点です。勿論、全く本文と違う選択肢には対応できると思います。今回の場合、最初の段落に「なぜうわさをするのか、人びとの動機の面から考えてみよう。」とあり、それに沿って論述がなされているので、イは本文内容に合致しています。アは②に該当し、「うわさはいい加減なものだと思われているが、意外と正確なことも多いのである。」とは書いてありますが、その是非・評価として「いい加減なものと判断しない方がよい」とは書いていません。ウは①（後半部が異なる）に該当し、「うわさを生み出す」理由は「情報を求めること」と「気持ちを共有すること」の2つであって、「解消」を目的とするとは書いていないので明らかに異なっています。エは①（組み合わせが正しくない）に該当します。確かに「ゴシップが相手との距離を縮めてくれる」場合があること、「ゴシップが場つなぎ等の話題になる」ことは書かれています。しかし、この二つの関係として、「ゴシップが場つなぎ等の話題になる」から結果として「相手との距離を縮めてくれる」場合があるのであって、エのように「ゴシップが相手との距離を縮めてくれる」役割を持っているから「ゴシップが場つなぎ等の話題になる」という因果関係としては書かれていません。

なんとなく解答するのではなく、本文内容と各問の文章とを丁寧に比較する必要があります。